

13. 蔵原 東久保遺跡

所 在 地 高根町藏原字東久保936番地外

調査原因 広域営農団地農道整備事業
(ふれあい支援農道整備事業)

調査期間 1999年5月12日～2000年3月31日

調査面積 4,494.11m²

調査主体 高根町教育委員会

担当者 雨宮正樹



当遺跡は、八ヶ岳南麓の標高約650mを測る、西川により開析された高台に位置し、南北に延びる尾根状の台地の南に面する緩傾斜地に立地する。ここより西側に約50m離れたところが市民農園整備事業に伴う発掘調査を行った宮の前遺跡がある。

この農道は、国道141号通称箕輪バイパスの新田大林より西に向かい、大坪原を経て中藏原の集落を通り抜ける、平成11年度の事業分としては上記の市民農園までの総延長約1km区間が調査区域であった。

この事業地内は水田（ほ場整備事業による整備済）と山林で遺跡の有無が確認できないことから、事業に先立ち平成11年2月から3月にかけて試掘調査を行った。これによると新田大林、大坪原からは遺物の出土は見られなかった。この農道は箕輪バイパスより市民農園までをほぼ一直線で結ぶことから上記の3地点はほぼ同一標高上に位置するが、遺跡が確認されたのは、藏原のみであった。このことは、遺跡が所在する意義の一つの回答を示す事例であろう。

検出された遺構は、平成11年12月現在のところ縄文時代中期中葉の竪穴住居址14軒、中期後葉の竪穴住居址10軒、単独の石囲い炉1基、単独の埋甕4基、土壙4基、平安時代の竪穴住居址3軒、近世の石祠1基がある。この石祠は、現在中藏原に鎮座する諏訪神社の古宮の跡地であると伝承され、さらにその南にも古宮という字名が存在していることは、興味深いことである。

調査に先立ち予定地内のほぼ半分の表土除去を重機により行ったが、遺物包含層が非常に厚い上に表土が薄いことから、ごくわずかな表土除去であり、表面上及び表土中より拳大から人頭大の礫が散乱している状況が見られた。特に最高地点付近において住居址が3軒ほど検出されているが、この覆土中からは多量に出土している。

遺構掘り込み面は黒色土中からのものであるため、より詳しく遺構の状態を見るために、調査区内に2.5mピッチで合計10本の、東西方向に幅50cmのサブトレンチを設定し、遺構検出を行った。このことにより、調査地区内のほぼ中央部に最高地点があり、ここから東西両端に比高差約2mの傾斜がみられ、東側1/3から遺構は検出されず、西側斜面に進むに従って、遺構は激しく切り合う状況がうかがえる。

現在調査中であるため不明な点もあり詳細については記述できないものの、住居址の配置については現状では環状に巡るものと思われる。

検出されている住居址には3形態が見られ、1つは円形で直径8mを測る大型のものであり、中央よりやや北側に寄った所に一边が約1mを測る方形の石囲い炉が見られるもの、2つは隅丸長方形で長軸は約6m、

短軸4mを測り、住居内のはば中央部に炉を持つもの、3つは小判型を呈し長軸は約6m、短軸4mを測り、住居内のはば中央部に炉を持つものがある。

平安時代の豊穴住居址については、縄文時代の住居址が完全に埋没する前の状況に有ったものを拡張してそのまま用いたようである。

縄文時代の検出されている遺構に限り出土している土器は、古い時期として井戸尻期、新しい時期として堀之内期まで確認されているが、堀之内期の住居址については、現在のところ検出されていない。

特記される遺物としては、中期の土偶4点、土鈴2点、土製耳飾り1点、ほぼ完形の土器8点あり、そのうち2点については、住居址内の炉東側に井戸尻期と思われる口縁部を欠く小型の深鉢1点と同じく、口縁部を欠く小型の壺1点が置かれたかのような状況で出土している。

平安時代の住居址については3軒検出されているが、カマドは既に破壊されており遺構の検出状況は不良であるため、遺構自体の存在は不明瞭であるものの、検出された遺構の形態と東壁のはば中央部の壁直下および壁面より比熱を受けた状況の固く焼きしまった焼土が確認されたことにより判断したものであり、遺構内外において遺物の出土は現在のところ見受けられない状況である。

これらのことにより、東久保遺跡や宮の前遺跡を含むこの地域一帯は、比較的大規模な遺跡包蔵地帯として、遺跡分布調査の時点においても確認されており、今後この道路による調査が西進することにより、この丘陵上に比較的幅の広いトレンチによる試掘調査を行うようなものであり、特に縄文時代中期の大規模集落を考察するうえでの重要な遺跡であろう。



東久保遺跡調査区全景